1991年5月5日発行（毎月1回5日発行）1984年2月10日第三種郵便物認可　ISSN 0286-4479

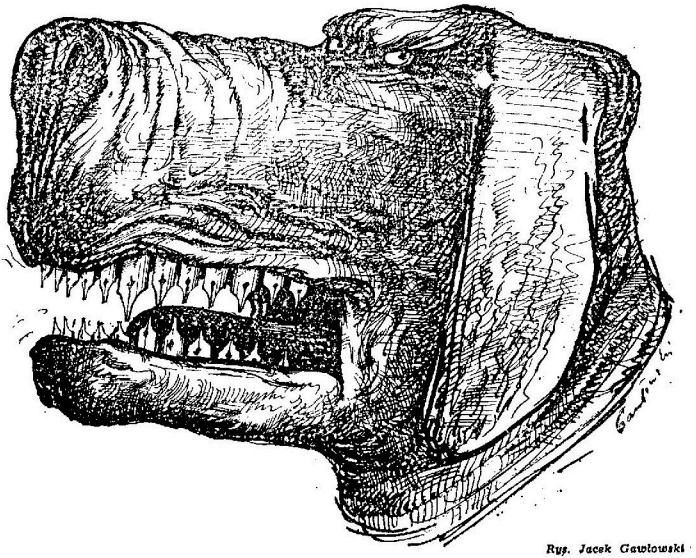
POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1991年
5月号
（通巻110号）
400円

シェワルナゼ元外相に聞く：A・ミフニク

多党制時代の政党　L・コワコフスキ



Rys. Jacek Gawłowski

☆☆　ポーランド月報　1991年５月号（通巻110号）　目次　☆☆

ポーランド資料センター解散のお知らせ……2

早急に国会議員選挙を　ワレサ大統領……3

「私の良心に汚れはない」　インタビュー：エドゥアルド・シェワルナゼ……4
聞き手：アダム・ミフニク

多党制時代の政党――宗教としての政党と手段としての政党……10
レシェク・コワコフスキ

共産党支配は倒れたが……マレクとイレナ：２人の旧「連帯」メンバー……14
今井　一

ポーランド日誌　1991年１月18日～２月21日……18

会員・読者へのお知らせ

ポーランド資料センターを解散します

４月20日、ポーランド資料センター幹事会は本センターを７月末をもって閉鎖することを決定しました。

本センターは、1981年10月、ポーランド「連帯」運動の思想と理論を日本に紹介することを基本的な課題として設立されました。

「連帯」運動は、長期にわたる困難な闘いを経て、1989年、ついに共産党支配体制を打倒、自らが主導する政府を成立させました。これをきっかけに他の東欧諸国でも共産党支配体制が雪崩を打って崩壊し、混迷の度を深めるソ連とともに、かつてのソ連・東欧地域の全体がいまや新しい時代を迎えています。

それとともに、ポーランド「連帯」の基本的性格も変化し、本センターを取り巻く問題状況は一変しました。このような状況を踏まえて、本センターはその基本的な役割を終えたと判断し、閉鎖を決定した次第です。

『ポーランド月報』は、６月号まで通常どおりに発行し、７月号を最終号とします。最終号は、創刊号以来の総目次と人名索引の特別号とする予定で準備を進めています。この10年間の活動の若干の総括に加えて、会員・読者の皆様のご意見・ご感想を掲載したいと考えます。原稿をお寄せ下さい。

すでにいただいている会費・購読料の残金の清算方法など、解散にともなう諸問題の処理方法は、次号であらためて詳しくお知らせします。

なお、本センター関係者の有志を中心に、ソ連・東欧全域の変革運動の理論と思想を季刊誌の形で紹介する新しい組織、「［ソ連・東欧］資料センター」の設立準備が進んでいます。本センターとしてもその設立に協力したいと考えます。

1991年４月27日　ポーランド資料センター

早急に国会議員選挙を

ワレサ大統領

President Walesa's Letter to Sejm on Need for Early Elections
Uncensored Poland News Bulletin, No 5/91, 27 March 1991

【編集部注】 ワレサ大統領の書簡に基づいて国会選挙の早期実施の問題を審議しした下院は、3月7日、大統領が提案した憲法改正案を266対63（棄権29）、選挙法改正案を347対6（棄権28）の圧倒的多数で否決、かわりに国会を秋に解散して、10月末日までに総選挙を実施することを決定した。内政面でのワレサ大統領の前途は多難である。反ワレサ派政治組織ＲＯＡＤは「内政の混乱を回避できる」としてこの決定を支持している。

2月22日、私は選挙法改正案の大統領原案を下院に送った。これは、下院憲法委員会での選挙法の審議状況とそこで作成されつつある改正案から、総選挙の期日とポーランドの将来の政治体制について重大な脅威が生じつつあると判断されたからであった。

私は今日のポーランドが、早期の総選挙と、主要政党の形成およびその選挙連合の成立を可能とするような新しい選挙法を必要としていると確信する。こうしてのみ国会は、われわれの共通の家であるポーランドの真の主人となれる。ポーランドの直面する諸問題を整理し、カオスと混乱を終らせることが今なによりも必要である。誰にどのような権限があり、何について誰が誰を代表するのかさえ、わからないことが多い。国会を含む政治制度に対する幻滅と不信を終らせなければならない。わが国の国際的立場の強化のためにもこれは必要である。隣国における不吉な現象が生みだしている危険に備えるためにも。

時代遅れになった円卓会議合意は今は破棄されるべきである。それは、過去においては必要だったが、現在は国民のエネルギーの結集を妨げ、国民生活を沈滞させている［議場に苦笑のさざめき］。国会の自由選挙を終れば、政府と国家は――それぞれの責任分野で――社会の希望と期待に応えるための決定的な行動に出ることができる。

私が提案している選挙法は、国の分権構造に配慮し、社会が理解する単純な原則を基礎にしたもので、以上の目的の実現を可能としよう。

親愛なる下院議員諸氏。今やポーランド共和国の選挙で選ばれるべき役職はすべて、市民の自由な選択の結果であるべきである。今やポーランドの民主主義に対する脅威に抵抗しなければならない。国会選挙は5月26日に、分権的な選挙法に基づいて実施されるべきである。それゆえに私は、これを可能とする決定を下院が下し、ここに同封する選挙法改正案を採択されるよう求める。私ならびに諸氏の国家に対する責任の名においてこれを要請する。

第10期国会はひとつの契約に基づいて選出された。今やそれは、決して過小評価することのできない重要な機会を前にしている。ポーランドのために完全な民主主義を築き、その独立を強化するためのまたとない機会を作り出した国会として後世の歴史に残る、という機会である。

「私の良心に汚れはない」

インタビュー：エドゥアルド・シェワルナゼ

聞き手：アダム・ミフニク

"Mam czyste sumienie"
"Gazeta Wyborcza", 6 kwietnia 1991r.

はじめに

ロシア連邦代議員大会が開催されていたクレムリン宮殿からやっとのことでミフニクをひっぱりだすことができた。3月28日木曜日、午後2時にわれわれはエドゥアルド・シェワルナゼと会う約束していて、遅れるわけにはいかなかった。しかも、通りの流れは混乱の極みだった。私は、5分遅れるくらいなら、30分早く着くほうを選びたかった。

大会会場のことを言えば、蜂の巣だか蟻塚だかをつついたような騒ぎ、というような歯の浮くような月並みな文句になってしまう。

クレムリンに着くまでに3回、警察の検問に出くわした。ミフニクの外交官用パスポートと私の特派員証のおかげでたいした苦労もなく道は開けたが——警察官たちは穏やかで感じが良かった——衝撃的な光景だった。新聞記者たちがよく車を止めておく場所に、その時は数十台の軍用トラックがあった。ワシーリー・ブラジェンヌイ寺院のそばには護送車と放水車が控えていた。

戒厳令？

私が駐車場所を探しているあいだ、アダム〔ミフニク〕は警察の大佐とお喋りをしていた。「これですべて片がつくのかね？」。「親愛なるポーランドの同志—— 大佐が答えた——でも……それはあなたの方がご存じでしょう。誰もがお互い角突き合わせていて。奇跡でも起これば対話が始まるでしょうが」。

エドゥアルド・シェワルナゼとの会見が行われたその日、そこには独特の色合い、2度とは決して味わえない雰囲気があった。われわれモスクワにいた全員が、今日という日がいったいどのようにして終わるのかと緊張して待っていた。行動への意志はほとんど肉体的なものになっていた。これまでは一度も広場や街頭に出たことのない人びとがデモに参加する用意をしていた。禁止や命令などだれも怖がらず、かえって正反対の結果になった。

だれもが最悪の結果を予期していた、しかしだれにも降伏するつもりはなかった。

クレムリン宮殿ではアダムの多くの友人、知人たちから、「いざという時」になにをすべきか、どう振る舞うべきかを尋ねられた。アダムはまずはじめに幻想から自由になるよう警告した。たぶん警官たちは（兵士たちも同じく）むしろデモに進んで参加したいのであり、命じられた仕事をひどく嫌悪しているに違いない。しかし、それでも彼らはやったのだ。命令にしたがい、放水し、催涙ガスや弾丸を群衆に向けて発射したのだ。

「なにを思い出します？」自由ヨーロッパ放送の記者アンドレイ・ボビーツキが尋ねた（そういう時代がやってきたのだ——自由ヨーロッパ放送の記者が自由にクレムリンに出入りしている）。「なにをだって？——ミフニクが言った——そう、すべてのポーランド人にとって、戒厳令だ」。

クレムリンから、シェワルナゼの国際研究所のために市当局が提供した建物のあるレリザローヴァ通りにわれわれが着いたのは指定の15分前だった。そこで分かったのだが、実は時間はたっぷりあった。エドゥアルド・シェワルナゼはアメリカ合衆国議会代表と会っていたのだ。

「アメリカ人はいつだってわれわれとポーランド人のあいだに入りたがるもので」。シェワルナゼの助手テイムラス・スチェルバーノフ（父がロシア人、母がグルジア人）がそう冗談を言った。「私たちの方はかまいません、悪いことではない

しね」とミフニク。「われわれも努力は惜しみません」。スチェルバーノフが答えた。

反抗的な山の民

30分間は無駄な時間ではなかった。これから話をする相手について興味深い話をいくつか知ることができた。

エドゥアルド・シェワルナゼは農村出身で、誇り高く、プライドを持った、常に反抗的な山の民の出であった。こんなひと口話がある――ある山の民の男が窓の外に手を出してみてこういった。「また雨だ。お上など呪われてしまえ！」

あるいはそのためかもしれない、シェワルナゼはグルジアの事実上の支配者としていつも新しい試みを実施した。彼は堅固な地位を手に入れ、自由に次々と新しいことを始めた。事実、彼は農業、飲食業、小規模店を活性化した。その政策は見事に首尾一貫していた。今日のグルジアは独立できるだけの強力な経済基盤を持っている。それをどう活用するか――それはまた別の問題だが。

その晩、われらがロシアの友人（20年まえに政治的な理由で科学アカデミーから追放され、事実上は失業状態にある文芸批評家）は、共産主義者たちは彼らから体制の敵を奪い去ったエドゥアルド・シェワルナゼを決して許さないだろうと話してくれた。敵がいなければ体制は存在できない、かつての体制を取り戻すためには敵を取り戻すことが必要になる。体制の力はもはやあまりにも弱すぎるのだ。　　レオン・ブイコ

ポーランド駐留ソ連軍の撤退

――大臣！　いまわれわれが目にしているソ連国内のできごとはポーランドに脅威をもたらすのか、もしそうなら、それはどのような種類の脅威だろうか？

ソ連の状況は極めて不安定だ。もし安定化に失敗すれば、もし状況がさらに先鋭化すれば、もし混沌とした状況が支配すれば――これは遺憾ながら現実の危険だ――もちろん、わが国にとっても脅威となる。それは全ヨーロッパと全世界にとっても脅威となるだろう。不安定なソ連――それが最も危険なのだ。ソ連の安定は世界の興味の的になっている。

――ポーランド駐留ソ連軍の撤退に関する現在の論争はソ連の不安定な状況の結果なのか、それとも新しい対外政策が狙っている効果なのか？　ミハイル・ゴルバチョフはタデウシュ・マゾヴィェツキに対して1991年までにポーランドにいるソ連軍を撤退させると約束した。それが今は1994年になったと聞く。ポーランドにいるわれわれはそれをどう理解したらよいのか？

私はポーランドにいるソ連軍の撤退問題で事を起こしたくない。ハンガリーでやったように、可能な限り早く終わらせてしまいたい。ドイツにいるソ連軍の撤退の方がソ連にとっては関心がある。あなたがたにとってもその方が好都合なはずだと思う、それはポーランドの関心でもあるだろうから。

――その背景には軍とのいざこざがあるのか？

それはない。われわれはポーランドにいるわが国の軍隊の問題を、ハンガリーやチェコスロヴァ

キアと同じように解決したいのだ。ソ連国外で軍隊を維持する意味はないと思う、それはただ双方の関係をややこしくするだけだ。私はいまでもそう思っている。

――なにがあなたに外相辞任を決意させたのか？

今は、すでに言ったことになにか付け加えるのは難しい。反動勢力や一部の保守派からの脅し、外務省とその対外政策にたいする数々の攻撃、それらがあまりにも激しく、辞任を強要されているように感じた。それに、専制と全体主義の復活に対抗し、ペレストロイカや新しい考え方、新しい対外政策を守るためには民主派を結集する必要があるとも考えた。もちろん、これらの決定は一時的な感情から出たものではない。私の決定が民主主義を守るための助けになることを期待している。実際、今日見ているように、民主勢力は力をつけ、非常に強固に組織化されている。

新しい東欧政策

――あなたのふたつの演説が私の記憶に永久に刻み込まれた。それらは歴史に残るだろう。ひとつは――ソ連共産党第28回大会でソ連の対西欧政策の誤りについての語ったときのもの。もうひとつは　外相辞任のときのもの。このふたつの演説は忘れられない。ソ連の対外政策はどのように変わったのか？　どのようにあなたが変えたのか？

新しい対外政策は一定のプロセスを踏んで形作られた。それはいつもひとつのプロセスだ。ドイツ統一が不可避であるとの前提からそれは作られた。私がそれを言い出したのは　まだ公表してないが――1986年のことだった。それは初歩的な論理だ。これほどの伝統、歴史、文化、独自の哲学を持ち、これほどの経済力をもった民族が、分裂に、20世紀の例外に甘んじていられるはずがない。

東欧諸国についていえば、最初私はそれを真の

共同体であると信じていた。私はたくさんの友人に出会った。外相、国家指導者、政治家。関係は非常に良く、真摯で、隠しだてのない付き合いだった。話し合いは友好的で、良い雰囲気だった。しかし、そのうち、このような関係は長くはもたない、それぞれの国民が求めるものはわれわれの想像とは異なっているのではないかという考えが生まれてきた。

私は非難された。これらの国を失った、われわれの「緩衝地帯」を売り渡したという。これらの国、東欧諸国との関係はいつも私を最高に誇立たせた。こうした認識、こうした評価、ある国を戦利品扱いすることはその国民に対する侮辱なのだ。それは大ロシアのショーヴィニズムの現れだ。私が第28回党大会の演説で言ったのはまさにそのことだった。

私を非難した者たちは早々に忘れてしまったか、それともニュースを受け入れたくなかったのかもしれないが、ポーランドでの変化の過程が始まったのはペレストロイカよりかなり早かった。当時のソ連指導者たち――ブレジネフ、スースロフ――は、もうそのとき、ポーランドに対しては力の政策は適用できない、軍隊と戦車は効果的でないと理解していた。私はスースロフが電話しているところにいた、彼は電話の相手の質問にこう答えた――「わが軍のポーランド介入が望みだと？　連中に言ってやれ、そんな命令は出ないとな」。そのとき私はスースロフの執務室で彼の机の脇に腰掛けてそれを聞いていた。当時の指導層は、10年も前に、すでに力の政策ではなにもできないことを理解していたのだ。

東欧諸国を回りながら、ある時私は、東欧の国民は自分の言葉で話し、決定は国民に委ねられるのだと確信した。そのとおりだった。どこでも平和的な革命が起こった。ルーマニアでさえ、悲劇的な結末であったものの、しかし、そこでも革命は平和的性格を帯びていた。

これからのあなたがたにとって重要なのは、新しい挑戦、新しい時代の問題とどう折り合いをつけてゆくかだ。しかし、私の信じるところ、あなたがたはきっとすべての困難を乗り越えてゆくだろう。

後戻りはもうない。多分われわれは、パリで署名された合意文書にその最後の表現を見いだすすべてを抹消してしまったのだろう。悲劇だった。

――もう一度わが国の歴史、1981年に戻りたい。当時、ソ連の介入の危険は事実だったのか？

そう、間違いなく危険はあった。それを望み、「秩序の導入」を要求する者たちがいた。われわれは、ポーランドの状況に力の政策を適用してもなんの役にも立たないことを理解していた。その問題はすでにアフガニスタンで経験済だった。

あの困難な時期を比較的軽い痛みで切り抜けられたのはヤルゼルスキの功績だ。彼の考え方は知っている、彼とはよく話をした。彼を愛国者だと感じたし、彼には確かな誇り、自尊心が感じられた。彼は要となる人物で、彼ならば最悪の事態は避けられると思った。

専制の脅威――対話は可能か？

――あなたは専制の脅威を警告した。今日見たところ、クレムリン――議会とその周辺――には警察の非常線があり、非常線の背後に、議員から遠く離れて、有権者たちがひしめいている。ミハイル・ゴルバチョフ、国の民主化のためにあれほど多くのことを成し遂げた彼が今、悪い方向に向かっている。あなたはこのことに不安を感じないのか？

身にしみて感じているし、身震いしている。その効果は予想できない。ペレストロイカの創始者がそのような手段に逃げ込むことが納得できない。わが国の社会には深刻な対立があり、それが社会的、政治的動きを極めて複雑にしている。しかし、真の悲劇は対話がないことだ。それなくしては対立の理性的解消は不可能だ。

ほかに解決方法はあった。デモの組織者と話し合うことも可能だったし、デモにやってきたひとびと会うこともできたのだ。

だれかが権力を握ろうとしているという可能性もあるかもしれない。私の手に負えないことだ。

この状況は、専制に対する私の警告に根拠があることを示している。対立の状況が混沌に、無政

府状態に行き着く、そのとき、専制がやってくる。どこからやってくるのか、右からなのか、左からなのか、それは重要ではない。その専制にどのような名前がついているのか知らないが、それを生み出すのは混沌と無政府状態なのだ。

――対話が開始される可能性はあるのか、それとも、ロシアは大いなる暗黒の時代に入るのか？期待を持てるシナリオはあるのか？　あるとすればどのような？

暗黒の時代、無政府状態、混沌、そういうものにはならないと私は信じている。そのような状況は専制の到来に行き着くほかない。エリツィンとゴルバチョフの対話はいまからでもに遅くない。われわれはアメリカ人を理解しようと努力し、レーガンを相手にした政策を始めた。それは「階級的」対話だった、しかし、1985年にはもう普通の、人間同士の対話になっていた。ひとつの民族から出たふたりの人間がどうして理解し合えない？ふたりともロシア人なのに。必要なのは内部対立を解消しようとする意欲であり、人間の基本に立った会話の開始なのだ。ソ連の安定には非常に多くのものがかかっている。

明日は新しい事柄が、新しい問題が起こるだろう、しかし今日は、これからは、対話が最も重要になる。通りのトラックの群れ、技術者たち、兵士たち――すべて恐ろしいものだ。ペレストロイカも6年目だというのに。私には理解できない。こんなやり方でひとびとと話し合うことなどできはしない。

無冠で何ができるか？

――あなたの履歴は非常に華やかだ。あなたは党と国家できわめて高い地位にいる。グルジア中央委員会第一書記、ＫＧＢ〔国家保安委員会〕長官……

ちがう、ＫＧＢではない。ＭＳＷ〔内務省〕だ。わが国ではたいへんな違いだ。

――前のあなたは旧体制の大黒柱によりかかっていた。今日、あなたの名前はソ連の平和外交の代名詞であり、国内政策においては民主主義の明確な選択を意味する。もはやあなたは外相ではない。どのようにしてあなたは自分の理念の実現を目指すのか？

幸いにも私はすべての段階を、すべての局面を経験している。どう振る舞ってはいけないかは分かっているし、わが国の社会の欠点も知っている。しかし、いちばん難しいのは人間そのものの内的な闘いだ。ひとはときに、自分自身との闘いで夜も眠れないことがある。外部の敵との闘い（ときには達成感と満足感をもたらす）よりもはるかに難しい。私は63歳になる――子供時代からずっと内面的問題と格闘し続けてきたのだ。私は信念を持った民主主義者となった。しかし（ある演説で言ったことがあるが）、私は８歳のときにスターリンを讃えた詩を書いたことがある。将来、多分、私の意見も変わるだろう、だが、おそらくは民主主義を傷つけることはあるまい。

――あなたは新しい状況にどんな姿で登場するのか？　これまでではじめて、あなたは公務に就いていない。回想録を書くつもりは？

辞任を考えていたとき、これからはもっと悪く、困難になると考えていた。しかし、実際は思ったより容易で、道義的な満足さえ感じている。私は自分の良心に対して、国民に対して、そして――おおげさな言葉を使わせてもらえば――世界に対して無垢であると感じている。私は私の話し相手に真摯に対応してきた。

いまでも私は役に立てる、それには必ずしも閣僚でいる必要はない。いつでも平和と民主主義のために働こう。出かけていって、話をし、説明しよう――私には何千もの招待が来ているのだ。健康さえ許せば、エネルギーはまだまだ十分ある。

新しい政治思考を守り、それを発展させよう。私はまだそれに何事かを付け加えられる。まだ非常にたくさんの有用なことを成し遂げられる、ソ連とポーランドの新しい関係の確立についてもそうだ。政策をつくるのは閣僚と大統領だけではない。普通のひとびともまた政策を作るのだ。

民族問題はどうなる

――民族主義について意見を伺いたいのだが。この問題はソ連のあらゆる共和国で大きくなっている、このロシア共和国でもそうだ。さまざまなニュアンス、さまざまな色合いの民族主義がある、良いものも悪いものも。

どんな世界観もそれぞれの否定的要素を持っている。民族主義という現象そのものには別に悪い点は認められない。しかし、幼稚で極端な、出来の悪い、犯罪じみた民族主義もある。そんなものにわれわれは手を染めるべきではない。それは、誰かが自分の民族が特殊で並外れたものである、他の諸民族とは異なる特別な現象であると信じ始めるときに起きる。そこから、他の民族は従属すべきである、この選ばれた民族に奉仕すべきであるという理屈が罷り通るようになる。

さまざまな共和国における民族意識再生の新しい波に乗って新しいひとびとが登場して来た。彼らはまだ感情に支配されている。いつの日かきっと、この新参者たちは、その場かぎりの思いつきではなしに、10年後の効果をも睨んだ政策を打ち出すようになるだろう。今、彼らのやっていることが未来に利益をもたらすのだろうか。

これからは統合の過程が進行するだろう、それが歴史にかなった流れだ。自己隔離は破滅に通じる。ひとは経験を積み、理解する。いま必要なのは忍耐だ。時は不信を癒す、たとえそれがきわめて根深いものであっても。痛々しい経験がひとびとの記憶に残っている。しかし時がたつにつれその悪い、否定的な重荷は克服され、まったく新しい関係を打ち立てる可能性が出てくる。

――ポーランドとソ連の間に新しい関係が打ち立てられるにはどれくらいの時間が必要だろう？

過去の重荷から自分を解き放つことができれば、新しい関係を打ち立てることもできる。それは、過去を水に流せ、歴史を忘れろと言っているわけではない。すべてを記憶しつつ、それでもなお、過去によって現在のわれわれの関係が決定されないよう、未来のために新しい関係をつくるべきなのだ。それにはもちろん時間が要る。

――インタビューに応じていただいたことに心から感謝する。

〔訳：篠崎　誠一〕

解体されるレーニン設念像。リトアニアで
（『今日のソ連邦』1999年1月号58頁から）

多党制時代の政党

宗教としての政党と手段としての政党

レシェク・コワコフスキ

Partia-religia i partia-narzedzie, Leszek Kołakowski
Gazeta Wyborcza, 30 marca 1991r.

【編集部注】 レシェク・コワコフスキは1927年生れのポーランドの哲学者。1958年からワルシャワ大学教授。スターリン死後の1954年以降、党内改革派の代表的論客の１人。56年事件10周年にあたる1966年の当局批判の講演のため党から除名、68年解職。以後イギリスに渡る。1983年９月の来日時のインタビューが本誌第20号（1983年11月）に掲載されている。主著『歴史と責任――知識人とマルクス主義』が邦訳されている（勁草書房）。

1　政党乱立時代

事情通の人々は私に言う、「ポーランドには約150の政党がある。法的に登録されているものもいないものも含めてね」。私にその数字を疑うべき根拠はない。政党のカテゴリーの中に、「前代未聞なほど高尚で士族的な欲求不満組合」や「俺だって大臣か上院議員になりたい党」や「華々しく活動する詐欺恐喝者連盟」といった類の種々雑多なグループも含めるとすれば、なおさらだ。このての団体の大部分がいずれ跡形もなく消え去るか、せいぜい人に顧みられぬ片隅で細々と存続することになるのは初めから明らかである。そうして、選挙に勝ち抜いた「本物の」政党がいくつかと、議会勢力としては微々たるものながらある種の問題では圧力団体として活動するだけの力を持つ小政党がいくつか、生き残ることになろう。

事情通の人々はまた、こうも言う。「議会の多数派をなすものも含め、これらの政党の中で真に勢力の翼を広げたり、多数の党員を集めたりしたものはひとつもない」。それはこういうわけだ。「自らの誤りや歪曲との闘いに休まずたゆまず従事している唯一にして無謬の人民の指導者党」の政府のこの数十年間を経験した後となっては、人々の間には情熱の湧き上がることはない。また別の理由もある。人々は来週の幸福を保証してくれる信頼できる計画を望んでいるが、反面、そんな幸福を約束する計画を軽々と信じるには彼らは賢明すぎるのである。

2　政党の「アメリカ化」と「一般化」

事情通の人々を信用するとして、私は「本物の」政党とはどんなもので、何に仕えるのか、と問うてみよう。ところが、「政党」という語がまた厄介で、「さまざまな価値基準に従って形成された、共に目標に向かって闘う人々の集まり」という意味においての政党は歴史の始まり以来存在し、史上重要な時代ごとにそれぞれ著名なものを見ることができる。たとえばマリウスとスラ（ローマ時代）、グウェルフ派とギベリン派（12～15世紀イタリアで対立した２政党）、ヤンセン主義者とイエズス会（宗教改革時代）などなど―― これらは集団の本来的性格から対立抗争に入っていく。しかしここでは、より厳密な意味での政党、すなわち近代の議会制民主主義の概念でいう、選挙で選ばれる立法機関において人々の利害や要望を代弁し代行する組織としての政党のことを指すとしよう。この意味で、共産主義体制やファシズムと一体の支配党や、第三世界の専制党は、たとえ政党の名を冠していようとも政党の部類には入らない。

政党は形式の面では２種類に分けることができよう。１つはイデオロギー的政党、すなわち、明確な「世界観」とまでは言わぬまでも少なくとも政治的な「最終目標」と、政敵に勝利したあかつ

きに創出されると彼らの約束する「すばらしき社会」像を持っている政党。もうひとつは、求心力となる完成されたイデオロギーを持たず、その時々の重要な問題を扱うためにできた政党。また別の基準で分類すれば、はっきりと特定層の利害を代表する政党（例えば農民を代表する党や工場労働者の党など）と、国民全体の利害あるいは全地球的な人類の利害を体現しようとする政党とにも分けられる。ただし、これらの分類は概念的なもので、社会での現実の姿と常に一致するとは限らず、またその一致の程度も様々である。

最初の分け方に従って考えると、一方の極には、完成された「科学的世界観」を擁し、すばらしい社会の要件は何かを知りつくし、その建設のための確かな処方箋を持った、古いタイプの共産主義政党が位置する。もう一方の極はといえば、米国の2大政党である。この2党はそれぞれ、伝統的に、関連性の薄い多種多様な個別利害の集合体である。そしてそれらの利害関係者たちは、税制、金利、軍備、犯罪対策、農業補助金、教育などの一般的諸問題に関して選挙で意思表示を行う（民主党をヨーロッパ型の社会民主主義政党に作り変えられるのではないかとの期待は、これまでのところ空振りに終わっている）。ここで強調しておかねばならないのは、「公正」「自由」「繁栄」といったスローガンは政党を識別するイデオロギーとはならないことだ。なぜなら、いまだかつて不公平や抑圧や貧困を要求に掲げた政党など存在しなかったのだから。

第2の分類法に従って考えた場合も、やはり一方の極には伝統的共産主義政党が来る――それらの党の教義は、一国の国民だけでなく全人類の普遍的かつ恒常的な幸福を約束した。そしてもう一方の極には、農民とか労働者といった様々な社会グループの個別利害を代表する諸政党がある。

ところで、近来ヨーロッパでは政党の「アメリカ化」が頻見される。すなわち、万人を対象に考えるイデオロギーや「最終目標」を捨て、かわりに眼前の社会問題の実際的解決を呼びかけるスローガンを採用する傾向である。政治に関心を寄せる人々は、このプロセスに関連して、ヨーロッパのなかのこれまでアメリカ的あるいはフランス的な大統領制を持っていなかった国々で、選挙が次第に大統領選的性格を増している――つまり政策より指導者の人間像を判断材料にする傾向が強まっている――と指摘している。さらに、その原因の一端は選挙戦でのテレビの影響が非常に大きくなったことにあるとしている。このような「アメリカ化」がポーランドでも起こり得ることは十分想像できる。

同時に、旧来は特定層の利害を代表していた政党が、次第に一般的・普遍的利害の代弁者的な性格を強めてきている。かつては労働組合の議会組織であったイギリス労働党は、いまでは組合から独立した存在であることをアピールし、労働者、ビジネスマン、自由業者、女性、農民、若者、高齢者、少数民族、納税者などすべての人々の利益を考える党になったことを示そうと大いに努力している（ちなみに、ここにあげた"すべての人々"は総計すると国の人口の約300%になる）。一方でイギリス保守党の方も同様に、これらすべての社会グループの代弁者であると謳っているばかりか、最近では階級なき社会をめざすとさえ言っている。

とはいえ、この両党が互いに違わないものになったわけではない。口あたりはよいが内容はな

いスローガンの数々を無視して考えれば、両党の違いは主として、諸問題のなかでどれを優先させるかに表れる。失業がすばらしい発明品だとかインフレはおいしいごちそうだとか言う人間は誰もいないが、片方の党は失業者が出てもインフレを抑える方が大切だと考え（むろん、「長期的に見れば」インフレ抑制は失業減につながってゆくのは明らかだと彼らは言う）、もう一方の党は逆の立場を支持する（むろん、効果的な失業対策が「最終的に」インフレを抑えることは言うまでもないと彼らはつけ加える）、といった具合である。このような「個別利害政党の一般化」も、ポーランドでも十分起こり得る。最も変化しやすいと考えられるのは農民層を代表する諸党であるが（発達した工業国では、農業人口が国民全体に占める割合は非常に小さくなり、農民の党はどんどん減ってきている）、それ以外の党に関しても、やはり「一般化」は起こり得る。

3　宗教的政党観、手段的政党観

ここまでは、「多数政党制」をテーマとする短い考察のための、長い序論であった。今日ポーランドでは、ほとんどすべての人が多数政党制を支持している――破産した共産主義の遺した財産を受け継いだ人々も含めて。

しかし、もしあるひとつの党が私の考えにぴったりであり、その党こそ他のどれとも違って、国民の必要の充足と不快で重苦しい社会の病の治療のための最善の処方を持っていると思われる場合、それでもなお私が多数政党制の支持者たるべき理由は何か？　この問にはふたつの答えがある。そして、その２つの間の違いは非常に重要であると私は考える。ふたつの答えによって分けられるのは、政党を宗教のごとく捉える考え方と、政党を手段として捉える考え方なのである。

宗教的政党観に従えば、次のような発言が出てくる。「もちろん私の党こそ最高の処方を持っている、しかし残念ながらすべての人がこの処方に賛成しているわけではない。反対する人々がいるのは、彼らの無知や愚かさや下劣さや私利私欲のためである。それゆえ、他の諸政党の存在も受容せねばならない。なぜなら、たとえ私の党がそれら他党を力で叩きつぶすことができるほど強力であったとしても、それをしたら、なおさら悪が生じるだけだからだ」。換言すれば、この政党観が最も望ましいと考える状況は、すべての人が、適切な経験を経た後にまったく強制されることなく「私の党」の正しさを認め、自由選挙で「私の党」が立法府の100％の議席を占めることである。

しかし、政党を手段と見る考え方に従えば、おのずと発言は違ってくる。「そう、私の考えでは、いま社会問題解決のための最高に信頼できる計画を持っているのはただ１つの党だけだ（常にただ１つだとは限らないが、少なくとも今はそうだ）。だが、だからといって他の諸党の存在は我慢するほかない必要悪というわけではない。むしろ少なくとも２つの理由で、それらには存在する価値が十分ある」。

第１に、社会全体が同一の考え方をするなどありえないからである。利害の対立は集団生活につきものの構成要素であって、欠陥のある政治制度の帰結ではないのだ。社会全体が同じ考えになり得ると考えることは、全体主義の誘惑に乗ることである。

第２の理由は、皆が同じ考えを持つのは決して

望ましくないということだ。人間にはいかんともしがたい認識力の限界があり、またわれわれは決して完璧に理性的な存在ではなく、自らの信奉する原理原則と自身の個人的利害を常にきっちりと分けることができるか疑問なためである（それゆえわれわれは全体の利益と個人の利益を混同せぬよう常に注意深くあらねばならない）。

われわれは自分が間違っている可能性を認める率直さと、他の人々に学ぶ心構えとを持たなければならない。だからといってあらゆる他党に学ぶ点があるわけではなく、例えば、憎しみや敵意をあらわにした何らかの教義の狂信者、ファシスト、人種差別論者、レーニン主義者などのグループも例外なしにいくばくかの真理を有していると考える必要はないが。しかしともかく、民主主義の枠内では、ある種の重要な問題に関しては私の支持する以外の政党の方が特定の視点から鋭い見方をしているかもしれない（すべてを包括する視点を持っているのは神だけなのだから）とか、それら他党の批判によって私自身の力の限界が補完されるかもしれない、などと仮定するのは良いことである。

ただし、各政党が対立なしに補完し合えると考えるのは甘い（マリタン《フランスのカトリック哲学者、1882～1973》はかつて、キリスト教における政治的複数主義のモデルとして、キリスト教の中に様々な教団や修道会があることを挙げたが、これは私が考えるところの複数主義ではない）。政党同士の補完はいろいろな状況下であり得るが、それはしばしば終わることのない対立と並存しているものなのである。

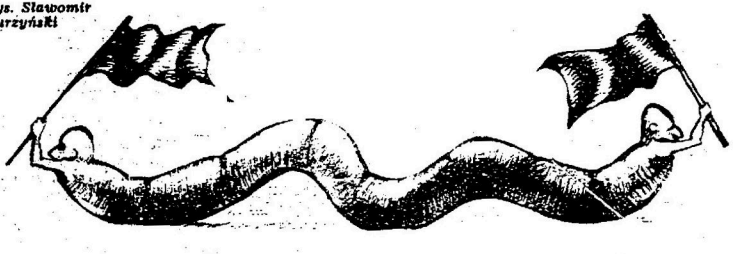
どれかひとつの政党を支持することと、その党が全権を握り反対も批判も外部からのコントロールも受けずに権力を行使する状態を決して望まないこととの間には、何の矛盾もない。むしろ当然といえる。一党の全権支配は、たとえ民主主義的手続きによって成立したものであれ（他の手続きによる場合は言うに及ばず）、必然的に自党の教義を至上とするおごり高ぶりや、自党の無謬性と全能性への無批判な信仰を生み、しまいには自分たちは法の制限を受けずに何をしてもよいという破滅的な考え方に至る（例えば、他人や公共の財産を好き勝手に収奪したり分配したり、また自然法や人権に反する法律を制定したり、意見を異にする人々を粛清したりしかねない）。

特定の利害を守ろうとすること自体は、悪くもなければ恥ずべき行為でもない。ただ、それを全人類共通の善であると言い立てたりせず、特定の利害としてありのままに提示することが肝要である。

自分だけが真理の持ち主であり、他の考えの人々の存在は必要悪として容認してやっているのだと考える者がいたら、それは――彼の信ずる真理がどのようなものであれ――レーニン＝スターリン主義の思考法である。一方、群れつどう人間が皆同一の考えになることが可能であり、そうあるべきだと考える者がいたら、その理想を実現する方法はただひとつ、無人の地へ行き、隠者となって自分ひとりでひとつの考え方にひたるほかにない。それ以外に方法はないのである。

〔訳：武井　摩利〕

Rys. Sławomir Burzyński



共産党支配は倒れたが……

マレクとイレナ――2人の旧「連帯」メンバー

今井　一

Rozmają Marek i Irena....
Hajime Imai

1980年夏に誕生した「連帯」。900万を超す人々が、さまざまな思いを胸にこの組織に結集した。そして、「共産党の独裁体制の中では腐ったポーランドが続くが、『連帯』が党に代わって天下をとりさえすれば、ポーランドは自分たちの理想通りの社会になるはず」だった。

ところが、共産党を打倒して「連帯」主導政権を樹立し、今やかつての委員長ワレサが権力の最高峰にまで昇りつめたというのに、社会は彼らが思い描いた《理想》とはほど遠いものになっている。

ここで紹介するイレナとマレクも、そんな「がっかり組」。2人が生まれ、育った思想的環境は正反対ではあったが、いつしか彼らの理想は一致するようになった。ワルシャワで聞いた2人の思いを伝える。

共産主義者の子供として

イレナ・コズウォフスカは、1931年10月にワルシャワ郊外のパベク刑務所で誕生した。当時、ポーランドの権力はビウスツキの手にあり、共産党は非合法組織となっていた。ユダヤ系の両親はその共産党のメンバーで、イレナが誕生する直前に投獄されたというわけだ。

ナチス・ドイツがポーランドに侵攻して来た後、両親は「国際革命家支援委員会」のメンバーとして抵抗闘争を続け、幼いイレナは、ビャウイストクで同志たちの手により育てられることになる。そして、41年6月からはイレナ1人がソ連の疎開地で暮らし始めた。この頃、ドイツ軍に捕えられた父親は、50年経った今も行方知れず。生死の確認さえされていない。

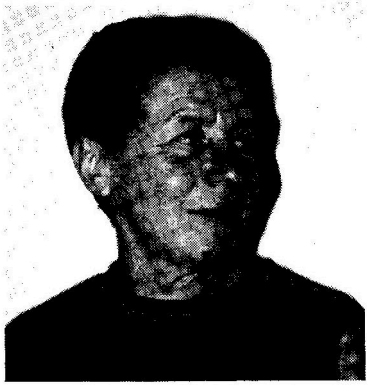
イレナが母親と一緒に再びワルシャワで暮らし始めたのは、45年6月になってからだった。戦後、ソ連に動かされた共産党がポーランド政治の実権を握り、母親はその中央委員会のメンバーとなった。イレナはそういった母親の影響を強く受け、ごく当然のこととして共産党に入党。

「両親たちの正義の理想がやっと勝利した。これで、これからは、みんなが自由で平等に暮らせる社会が必ずできると思った」。

イレナは共産主義者として希望に胸を膨らませていたのだ。しかし、早くも「懐疑の日々」が始まる。

「ゴムウカは信用できない人物だとお母さんからいつも聞かされていた。そしたら56年の事件。それなのに、私はまだ、きっとこれからよくなると信じていた。何もわかっちゃいなかったのよ。あのとき党をやめるべきだった」。

そして、《プラハの春》のときには「いよいよ、この（共産党の）イデオロギーはもうだめだ」と思うようになる。しかし、彼女にとって党は血を



分けた親族と同じ。ここでもまた、彼女は結局党を離れはしなかった。

「連帯」が誕生して

「81年のあの夏、『連帯』がストをやっているときは正直言ってとても怖かった。『連帯』にはチャンスがなく、弾圧され血が流れる可能性が高いと考えていたから。それだけに『連帯』が勝利したときは、68年のチェコでできなかったことをここで実現させることができる、つまり人間の顔をした社会主義をここで作れると思い、とてもうれしかった。そして、これで党も変わると思った。党は『連帯』と協力して、本当のポーランドを蘇らせることができると期待した」。

しかし、党は変わり切れず、81年12月にはソ連の圧力もあり戒厳令が導入される。

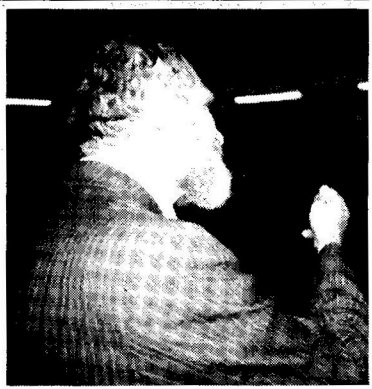
「すべてが駄目になったと思った。まったくの恥さらし。党やヤルゼルスキに弁解の余地はなく、戒厳令が敷かれた3日後、私は迷うことなく党を辞めた。でも、10年経った今、ちょっと違う考え方をするようになった。つまり、もし戒厳令を敷かなかったらソ連軍が入ってきたということに確信を持てるような証拠が出てくれば、私はヤルゼルスキを許すと思う」。

「あれだけ愛想をつかしたというのに、共産党が解散したとき（90年1月）は、悲しくてならなかった。父や母のことを思い出して涙が止まらなくなった。だけど、両親たちは自分たちが命をかけてやってきたことを、決して無駄なことだったとは思わないでしょう。そして、それは私も同じ。社会のために意義があったと信じたい」。

イレナは、笑みをつくりながらもちょっと悲しげにそう言った。

「反ユダヤ」の風潮

昨年の11月12日に行われたポーランドの大統領選挙を現地で取材していた私は、マゾヴィエツキ陣営の選挙集会で何度かイレナと顔を合わせた。そのうち、第1回投票の数日前、ワルシャワ経済大学にブロニスワフ・ゲレメク（前「連帯」議会



クラブ議長）がやって来てマゾヴィエツキの応援演説をやった集会で、実に印象的な事件が起こった。ゲレメクの演説が終わってまもなく、聴衆との質疑応答が始まり、ここで後方の席にいた、生真面目そうな若い男性が立ち上がってこう訊いた。

「巷では今、マゾヴィエツキ氏がポーランド人ではなく、ユダヤ人だという悪い噂が広まっています。そこで、きょうは、ゲレメクさんの口から、マゾヴィエツキ氏がユダヤ人なのかポーランド人なのかということをはっきりと伺いたい」。

「ナンセンス！」

最前列の席に座っていた若い女性が、後ろを振り向き、顔を歪めながら絶叫した。

「答える必要はない！」。

「いや、答えればいい」。

騒然となった場内の中にいたイレナの方に目を遣ると、彼女は顔を紅潮させ首を左右に振っていた。

「お静かに」と騒ぎをとりなしたゲレメクは、きわめて穏やかな調子でこう答えた。

「この問題については、先日、カトリック大司教がマゾヴィエツキ氏の家系を16世紀にさかのぼって調査したところ、彼は純粋のポーランド人であり、かつ、貴族の出身であるということが判明した。したがって、この件はすでに解決済みで何の問題にもならない」。

ユダヤ系のゲレメク氏からこんな情けない答え

を聞かされるとは夢にも思わなかった。隣席の友人は、「選挙期間中だからしょうがない」などと言っていたが、私は彼が「ユダヤ人だったらどうだというのだ。ユダヤ人で何が悪い」と言ってほしかったのだ。

「ポーランドに『反ユダヤ』の風潮が強く残っているということは、もちろんよくわかっている。だけど、ああいったところで、ああいった質問が出されることにはびっくりした。あのとき質問した彼に、まったく悪気がないだけに根は深いと思う。それにしても、ゲレメクにはがっかりした。わざわざ喧嘩をする必要はないけど、もっと毅然とした態度をとるべきだったわね」。

イレナは顔をこわばらせてこう言った。

先の大統領選挙を通して、社会の裏側で囁かれていた「反ユダヤ」が、はからずも表にくっきりと浮かび上がってきた。

イレナが誕生した共産党非合法時代も、共産党が政権をとってからもこの「反ユダヤ」は存在し、「連帯」が勝利してからも絶えてはいないという事実。この事実に心を痛めているのはイレナばかりではない。

＊　　＊　　＊

マレク・ミェチニコフスキ（40歳）――彼は、最近「連帯」マゾフシェ（ワルシャワを含む広範な地域の呼称）地方の専従活動家を辞めた。大統領選挙で彼はワレサではなくマゾヴィエツキの応援をしたのだが、これはマゾフシェ地方では少数派。選挙期間中から風当たりが強かったが、ワレサ勝利のあと、その風は異常なものになった。職場に行くと、頻繁にいやがらせ電話が入る。

「強制収容所にたたきこんでやる」。

「いつまでのさばってる。その窓からつき落としてやるからな」。

そして、ある日、ミサに行き教会から出てすぐ、見知らぬ男から突然「ユダヤの奴隷！」と言われる。これでもう彼の腹は固まった。彼は脅しに屈して専従を辞めたわけではない。連日繰り返される、こうした低次元な攻撃にうんざりしたのだ。

「自分にはユダヤの血は入っていない。だけど、

これまでユダヤ人に対して敵対的な意識を持ったことなど１度もない。生まれたときから、すでに彼らはここに暮らしていて、一緒にポーランド社会を形成して来た。それなのに……、ポーランドはいつまでたっても変わらないな」。

マレクはそういって顔をしかめる。

ＫＯＲから「連帯」へ

彼は、1950年の11月にワルシャワのジョリボシュで生まれる。叔父がワルシャワ蜂起で殺されるなど、一家は、ポーランド的な愛国主義に満ちており、それは「反共産主義」という感情にもなっていた。

1968年の３月、スト中のワルシャワ大学の正門に近づき、学生にパンを差し入れただけで逮捕。ビャオウェンカ刑務所に放り込まれ、そこで、一方的に殴られる。17歳のときのこの経験が、彼に、体制に対する憎しみを強く深く持たせることになる。

10年の月日が流れ、タクシーの運転手をしている頃、偶然にＫＯＲの非合法文書の運び屋となったのが、クーロンやミフニクらとのつきあいの始まり。そして、80年にはＰＫＳ（国営交通）の「連帯」地区委員長に選ばれた。

「『連帯』が誕生したときは、とにかくブラボーという気持ちでいっぱいだった。これで、共産

党を倒せるとは思わなかったけど、何とかもっとまともな社会を作れるはずだと期待した」。

ところが、思うように事は運ばず、彼を含め「連帯」の中堅幹部は次第にラディカルな運動に走るようになる。例えば81年の8月3、4、5日、政府が食肉の値上げを発表した直後、「連帯」はワルシャワのど真ん中のロータリーを、大量の市電・バス・トラックにより48時間にわたって封鎖、ヤルゼルスキを激怒させた。マレクはこのときのデモの責任者の1人として“名を上げ”81年の戒厳令では名誉ある逮捕。若い頃放り込まれたあのビャオウェエンカに再び入ることになる。

「毎日ミフニクやリティンスキたちと一緒だったから、何か家にいるような雰囲気で、別に務所暮らしはつらくはなかった」。

笑みを堪えてそういうものの、5カ月あまりの拘禁生活は、けっこうこたえたはずだ。

新しい社会をめざして

89年春に「連帯」が復活してから、マレクは毎日朝から晩まで選挙運動。念願叶って国政選挙で「連帯」は大勝し、まもなく共産党政権を打ち倒した。

「これでやっと若い頃から自分が思い描いていた理想的な社会、つまり各人が自由でありながら協力しあう社会、みんなが平等で、一緒にやっていける社会を生み出すことができると思った」。

マレクはそう期待し、イレナもまたまったく同じ思いを抱いた。しかし、現実はまるで違うものになっていった。

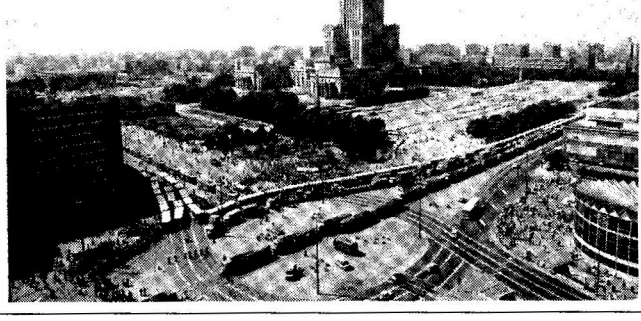
「ポーランドはいま安っぽい資本主義の道をどんどん突き進んでいて、強者はより強くなり、弱者はより弱くなっている。こんな社会にしたくて『連帯』を支持してきたんじゃない」

と、肩を落とすイレナだが、まだまだ戦意は失っていない。次の国会選挙では積極的に「民主同盟」と「ROAD」を支援するという。そして、マレクはまた朝から晩まで選挙運動に走ることだろう。

共産主義者として生きてきたイレナ。片や共産主義者を打ち倒す者として生きてきたマレク。彼らは正反対の思想を持ち、正反対の道を歩んできたように見える。しかし、どうやら2人は同じ理想を追い求めて生きてきたようだ。

「各人が自由でありながら協力しあう社会、みんなが平等で、一緒にやっていける社会」。

こういった社会に貼るべきレッテルは《共産主義》なのか《社会民主主義》なのか。イレナやマレクにとってそんなことはどうでもよく、肝心なことはポーランドを1歩でもそういう社会に近づけること。そして、2人はそのためにこれからも闘い続けるのだろう。



ポーランド日誌

1991年1月18日～1991年2月21日

1月18日　炭鉱労働組合と政府との間で賃上げについて基本的合意が成立。

1月19日　カチンスキ大統領府長官、大統領府の強化のための新しい組織構造を発表。

1月21日　ポーランド、ハンガリー、チェコスロヴァキアの外相がブダペストで会談、3国協力体制について協議。●政府、ラトヴィア情勢に深い憂慮を表明する。●カロル・モゼレフスキ上院議員、ワレサ派の中央同盟、反ワレサ派のＲＯＡＤに対抗する第3の政治組織「労働連帯連合」のプログラムを発表。現政府の社会経済政策に反対し、福祉国家機能の強化を主張。●シチェチンのワルスキ造船所労働者が賃上げ要求のストを予告する。

1月22日　ワレサ大統領がピエレツキ首相およびバルツェロヴィチ蔵相と会談。大統領府と政府との間の広報政策の調整方法を協議する。●ニューヨークで開催中のＧ７蔵相会議、ポーランドの対外債務40％の削減に支持を表明と伝えられる（ポーランド政府は80％削減を要求していた）。●ゴジュフ・ヴィエルコポルスキ、シチェチンなどで賃上げ要求の警告ストー。

1月23日　ブロニスワフ・ゲレメクが民主同盟（マゾヴィエツキ前首相率いる反ワレサ派政治組織）の国会議員団長に就任。

1月24日　上下両院外交委員会が、バルト諸国との協力問題を審議する小委員会を設置。●『ガゼダ・ヴィボルチャ』紙が伝えるＯＢＯＰ世論調査によれば、国会選挙を3月までに実施すべきとする人が37％、6月までが23％、年内が6％。●ワルシャワ、グダンスク、クラクフの炭鉱労働者が4時間の警告スト。

1月25日　大統領府の発表によれば、ワレサが提案した大統領諮問会議にこれまでに80団体が意見を寄せ、中央同盟が賛成、ＲＯＡＤとポーランド社会党が反対しているという。

1月26日　ピエレツキ首相、グダンスク大学で経済政策をめぐる初めての公開討論に参加、外国資本の導入の必要性を強調する。●ＲＯＡＤの第1回大会がワルシャワで始まる。党員数1万を代表する代議員300人が参加。W・フラシニュクが開会を宣言。

1月27日　ＲＯＡＤ大会、マゾヴィエツキ前首相率いる民主同盟との合流を将来に延期、国会選挙の早期の実施を要求。議長にフラシニュクを選出。

1月28日　中央同盟、国会選挙を5月末までに実施するよう求める声明を発表。●「連帯」マゾフシェ地方本部、新委員長にマチェイ・ヤンコフスキを選出。●グダンスク造船所労働者が賃金凍結政策に抵抗してピケをはる。

1月29日　コウォジェイチク国防相、徴兵期間を12カ月に短縮すると発表。●当局筋によれば、旧東ドイツから撤退するソ連軍車両200台がポーランド国境で1週間以上足止めの状態になっている。その通過の前提としてポーランド側は駐留ソ連軍の年内撤退を要求しているという。●中央統計局の発表によれば、昨年のポーランド経済は12％のマイナス成長に。実質賃金は28％低下したという。

1月30日　中央統計局の発表によれば、1990年の貿易黒字は38億ドルの記録的水準に達した。●憲法裁判所、学校での宗教教育を認めた教育相の指示は合法、合憲と判断。

1月31日　ボニ労働相、ジャーナリストと会談し、過剰賃金税、「ポピーヴェク」の廃止はインフレにつながると強調する。昨年末の失業者数が200万人に達したことを認める。●「連帯」系、ＯＰＺＺ系労組から過剰賃金税廃止要求が相次ぐ。●ルシン通信省次官によれば、民間および外国企業からのラジオ・テレビ放送局設立申請が270件に達しているという。

2月1日　ボニ労働相、ワレサ大統領と会談後、焦点の過剰賃金税問題について、政府の立場は「硬直的ではない」と語る。●ＰＡＰ通信が伝えるＯＢＯＰの世論調査によれば、政府の政策を26％は「満足」と答え、「受け入れられない」はわずか2％だったという。ただし44％が政策の詳細を知らなかった。

2月3日　ピエレツキ首相、スイスで開催された世界経済フォーラムで、ポーランド債務の80％帳消しを要請する。

2月4日　ＲＯＡＤが声明を発表、「民主主義と市場経済への移行が危機に面している。……大統領の周辺に対抗的権力センターが形成されつつある」。

2月5日　ワレサ大統領、イタリア訪問に出発。●欧州会議代表団がワルシャワ着。ポーランドの欧州会議参加問題の協議が始まる。●コザキエヴィチ下院議長、記者会見で国会選挙の5月実施を支持。

2月6日　コウォジェイチク国防相、ポーランドは中央ヨーロッパにおける「武装中立」の路線をめざすと

語る。●外相、ドイツ国境で立ち往生している撤退ソ連軍の車両200台の国内通過を認めると発表。

2月7日　大統領府、ワレサ大統領が3月20日から訪米すると発表。

2月8日　「連帯」と政府が経済政策の問題をめぐって会談。「連帯」側からはカチンスキ副議長らが、政府側からはビエレツキ首相らが出席、過剰賃金税問題について多少の歩み寄りがあったという。●ワレサ大統領提案の大統領諮問会議が第1回の準備会を開催。

2月9日　ＯＰＺＺと政府が会談。ＯＰＺＺからはミオドヴィチ議長、政府からはビエレツキ首相らが参加。●民主同盟は、ＲＯＡＤおよび民主的右翼フォーラムとの統一推進を決める。

2月10日　市民委員会全国大会、国会の早期解散と5月26日総選挙を要求。

2月12日　国有航空会社ＬＯＴとドルショップ、ペヴェクスの民営化方針が発表される。

2月13日　ワレサ大統領、市民委員会代表との会談後、国会選挙の早期実施を表明。大統領は、マゾヴィエツキ前首相の辞任前は、新政府に時間を与えるため選挙は先送りすべきだと主張していた。●ウルススのトラクター工場全部門が賃上げを求めて2時間の警告スト。

2月14日　ＯＰＺＺが組織した全国の炭鉱労組代表の抗議行動がワルシャワで展開される。代表たちは、大統領と首相に政府交替と政策変更、過剰賃金税の廃止を訴える。「連帯」各地方企業代表も過剰賃金税撤廃を求めてワルシャワで集会。●ＲＯＡＤのフラシニュク議長、民主同盟との統一を支持する発言。●チェコスロヴァキア政府代表、ビザ規制の問題でポーランド政府と話し合う用意があると語る。

2月15日　ハンガリーのヴィゼグラドで、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー3国サミットが開催される。ポーランドからワレサ大統領、ビエレツキ首相、スクビシェフスキ外相が参加。3国の協力の緊密化をうたった共同声明が発表される。●ワルシャワで過剰賃金税反対行動が続く。

2月16日　ポーランド農民党「連帯」第1回大会は、「連帯」系諸組織が統一して次期総選挙に取り組むよう求める。議長にユゼフ・スリシュ。●中央同盟、早期の国会選挙を求める声明を発表。●ソ連に統合された地域のポーランド人支援を目的とした「クレス（東部国境地帯の意）」連合（メンバー数7万5,000人）がワルシャワで旗揚げ。

2月17日　ワレサ委員長付属市民委員会が全国市民委員会（略称ＫＫＯ）に編成替え、議長にスジスワフ・ナイデルを選ぶ。●ＰＡＰ通信によれば、ワルシャワのＦＳＯ自動車工場、フィアット125の生産を停止。

2月18日　大統領諮問会議の設立総会。ワレサ大統領が7名のメンバーに辞令を手渡す。当初参加が予定されていたＬ・カチンスキ「連帯」副議長は、「連帯」議長選立候補を理由に辞退。●政府と「連帯」の会談、過剰賃金税問題で合意に達せず。●ＯＰＺＺ、過剰賃金税問題について主張が容れられなければ、2月27日から抗議行動を強化すると発表。●ポズナン、レグニツァ等で過剰賃金税反対のスト、抗議行動。

2月19日　ワレサ大統領、不評の過剰賃金税を含め現政府のインフレ政策全体を支持すると電話でビエレツキ内閣に伝える。●ウルスス、スウプスク等で賃上げ要求のスト。●「ファイナンシャル・タイムズ」によれば、ポーランドの1月のインフレ率は12%に。

2月21日　ポーランド外相、化学兵器の存否確認のための立入り調査を拒否したとして駐留ソ連軍司令官に抗議する。●レグニツァのバス労働者、グダンスク、ポズナン、ゴジュフ、コシャーリンなどの国営農場労働者、全国の教師などが賃上げ要求のストやデモ。

〔編訳：水谷　聡〕

編集後記

☆国際新聞編集者協会（ＩＰＩ）総会に出席するためにアダム・ミフニクが来日しました。ＩＰＩ関係者以外ほとんど知らされていなかったうえに、ごく短期間の滞在だったため、ポーランド資料センターとして接触することはできませんでしたが、個人的に面談できた人がいます。そのときの模様を次号で多少お伝えできるかもしれません。

☆なお、ミフニクは本年秋にあらためて来日の予定があると聞きます。

☆2頁でお知らせしたとおり、この7月でポーランド資料センターの活動に終止符を打ちます。財政的に破綻して、あるいは方針を見失って、などといったいわば「野たれ死」ではなく、役割を終えたという総括に基づくものです。会員・読者の方々にもご理解いただけるものと考えます。

☆新しい状況に新しい陣容で臨む新しい組織の結成準備が進んでいます。多くの方々の理解と協力を得て成功させたいと思います。1991.4.27(み)

ポーランド月報（九九一年五月号（通巻一一〇号）
九九一年五月一五日発行（毎月一回五日発行）
九八四年二月一〇日第三種郵便物認可

ポーランド月報　既刊号　目次

1991年1／2月号（通巻106/107号）　32頁　500円

大統領選挙（第1回投票）の結果について……3
　レフ・ワレサ／タデウシュ・マゾヴィエツキ
民主主義を破壊するカリスマ的指導者……5
　なぜ私はレフ・ワレサに投票しないか　アダム・ミフニク
なぜ私はワレサを選ぶか——知識人主導を懸念する
　ステファン・キシェレフスキ……14
ポーランド経済：制約と機会……16
　ツェザリ・ユゼフィアク
共産主義者のいない共産主義　テレサ・ボクツカ…22
社会主義はどこに？
　ポーランド・グダンスクを訪れて　清水正徳…28
ポーランド日誌　1990年10月18日～11月8日……2/31

1991年3月号（通巻108号）　20頁　400円

改革遂行に全力を尽くす　レフ・ワレサ……3
　大統領戦勝利記者会見　1990年12月19日
　★ビエツキ内閣閣僚名簿……6
ポーランド第3共和制の発足……7
　ワレサ大統領の就任演説　1990年12月22日
破壊された国民的合意……8
　マゾヴィエツキ首相の辞任演説　1990年12月14日
色つきの夢から目覚めよう……12
　インタビュー：ヤツェク・クーロン
ポーランド日誌　1990年11月9日～12月20日……2/18

1991年4月号（通巻109号）　20頁　400円

「連帯」臨時大会
「まず動き出そう」……3
　マリアン・クシャクレフスキ新委員長に聞く
「連帯」臨時大会で何が起こったか……5
　マリアン・クシャクレフスキの前途
敵がいなくなった今……8
　「連帯」が直面するジレンマ　イエジ・ヴィツツキ
「連帯」臨時大会の課題——指導者に聞く……10
　A・スウォヴィク／S・ヴェングラシュ／L・カチンスキ
政労関係を緊張させる賃金政策の不一致……13
　「連帯」在外調整委員会
嵐の中でのポーランドの望み……16
　スクビシェフスキ外相に聞く：『ジチェ・ワルシャウィ』
子供が見た大統領選挙……18
ポーランド日誌　1990年12月21日～1991年1月17日……2/19

発行所・ポーランド資料センター
Center for Polish Research
〒177　東京都練馬区下石神井6－35－7
電話　03－3904－0427　郵便振替　東京　2－81069
6-35-7 Shimo-Shakujii, Nerima-ku, Tokyo 177 JAPAN
定価400円・年間定期購読料4600円（送料共）